

今季節は__ですが、二十四節気でみると__の頃にあたります。

月の運行を元にした太陰暦は、明治初年にグレゴリオ暦が導入されるまで、日本でも使われていた暦です。太陽暦の1年より約11日短いことから、しばらく使っているとうるう月やうるう年を入れる必要があり、これを適切に成さないと実際の季節との間に大きなズレが生じることになってしまいます。

江戸時代以前、ひとびとは稲作をはじめ現代よりも密接に自然に接していて、季節を知ることが非常に重要なことであったわけですから、きちんと季節の進行を知ることのできる暦がないと、たいへん不便なことになっていたはずでした。

太陰暦のズレを補うために中国で考案されたのが、太陽の運行を元にした二十四節気で、日本に伝わり江戸時代の暦と合わせて使われていました。立春や立秋をはじめ夏至、冬至、大暑、大寒といった文字どおり24種の分類になっています。

その呼び名には、昼夜の長さや気象、生物に着目した名前が付けられていて、これにくわえ日本の気候に合わせて、節分や半夏生、土用といった雑節という区分も取り入れられています。

今でもテレビなどで紹介されるだけでなく、カレンダーにも記載されていますから、日ごろ見聞きする機会が多いのではないのでしょうか。歴と季節とのズレを意識することのなくなった現代ですが、立春が一年で最も寒い2月4日くらいであったりと、暦日とのズレが大きな二十四節気がいまだよく使われているのも不思議なことです。

これは、昔から生活と季節を結び付ける情報であるだけでなく、その語感に風情を感じるからなのかもしれません。